

【クスリの効き方について】

漢方医学と西洋医学の薬物療法を比較してみますと、漢方では自然の恵みである生薬を用いるのに対し、西洋医学では有効成分を化学的に合成して用いるという基本的な違いがあります。漢方治療は人間が本来もっている自然に順応し、良くなろうという生体の治癒反応を多様な角度から援助しようというわけです。長い歴史の中で、多くの先人たちが草根木皮の試行錯誤を繰り返し、その経験の中で作りあげられたわけです。ですから漢方薬はあくまでも生薬の配合理論に基づいて組み立てられています。単味の使用は例外的です。また生薬の一つ一つにも多くの有効成分が含まれていますが、この生薬をさらに組み合わせることによって、患者さんの個々の症状に対応するのはもちろん、そういった複数の訴えをもつ一人の人間に対する有効な薬方となります。

これに対し、西洋医学では、生体から疾患を除去しようという考え方が中心にあり、人間全体に対する薬というよりも、生体の局所における作用という一面性が強調されています。確かに化学療法の開発が人間の歴史の中で果たした役割は多大なものがあります。ただ結果として臓器組織への特異性が重視された薬物が数多く生み出されてきたことになり、薬物の生体反応における多面的な役割が軽視される傾向にあったともいえます。なぜでしょうか。

それは、西洋医学的な病理観が、生体の臓器組織あるいは細胞単位で考えますから、疾病を「かたち」と「はたらき」との統合という立場に立って薬が開発されてこなかったところにも、一因があるように思われます。誰もが罹患するカゼ一つとってみても、感染と発病との間に未知の部分は多くあります。しかし現在の病状からその展開を予測する、つまり病態は常に変化していると見る立場で機能と形態の統一的疾病と理解し、生体における生薬の多面的な働きを見直してみたいものです。